

学生ならではのアイデアと突破力が光る!

長大生の自主活動 3本立て



Peace Caravan隊

被爆の実相から核軍縮まで 自分の言葉で伝えたい

「皆さん目を閉じてください。今、世界に存在する核兵器は1万4,450発です。この数を耳で体感してください。」

8月9日、長崎総合科学大学附属高等学校で行われ

たPeace Caravan隊の平和講座。目を閉じて聞こえてきたのは、1個の落下音。次におびたしい音の大群でした。1万4,450発の小玉を金属の箱にこぼし続けたのです。どよめく生徒たち。ある小学校では「地球が壊れるかと思った」とつぶやく子どももいたそうです。

Peace Caravan隊は、小・中・高生や、一般社会人などの元に出向いて平和講座を

この一玉一玉が、
核兵器だとしたら??



これが1万4,450発の正体。プラスチックのBB弾を使っています。米国の軍縮教育家キャサリン・サリバンさんのアイデアを取り入れました。



小学生には原爆の爆風や熱線、放射線の話を中心に、中高生には現在に比重を置いて核の傘や抑止力の話を展開するのだそうです。

行うグループで、被爆の実相や世界の核兵器事情、今自分たちにできることなど、核問題を分かりやすく伝える活動を続けています。この日は、光岡華子さん(教育学部4年)、上川康平さん(教育学部3年)、酒井環さん(長崎純心大学人文学部3年)の3人が登壇しました。核兵器禁止条約や米朝首脳会談など刻々と変わる世界情勢も取り入れた90分。これまで海外も含めて48回開催し、6,424人に講義を行いました。「長大の文教キャンパスはかつて、魚雷を作る兵器工場でした。自分たちの大学がそういう場所にあるというのも、私が核軍縮を学ぶ理由の一つです」と語った上川さん。被爆から73年。彼らのような学生が平和教育の新しい可能性を切り開きます。

弁当箱の
リサイクル



箱。長大生協で販売する弁当は容器がリサイクルされており、食べ終えて内側のフィルムを剥がして返却すると、デポジットの10円が戻ってきます。このシステムを利用して使用済みの弁当箱を回収し、まとめて換金して被災地に寄付するのがRFDの主な活動です。

Re:ちやいくる

放置自転車を修理、格安販売 長崎大学の自転車問題に挑む

長崎大学で自転車は必需品。坂の町長崎としては珍しいほど、学内の自転車人口が多いのです。キャンパス内の放置自転車も、多い年で年間300台、処分には30万円以上がかかるといいます。それを「もったいない!」と思った学生たちが立ち上がりました。「放置自転車はリサイクルできるものもあります。そこで私たちは、大学から90台ほどを譲り受け、自分たちで修理することにしました」とRe:ちやいくるの「工場長」吉村智大さん(水産・環境科学総合研究科修士2年)。修理した自転車は、新入生・留学生を対象に格安で販売し、その代金を工具や部品代にすることで持続可能なシステムにしています。最初は修理に詳しい人にバンク修理やタイヤ交換などを習い、今ではメンバーが週末に集まって共同作業。直した自転車は3,000円



キャンパス内の放置自転車は、大学の学生支援課により貼り紙で数か月間告知され、防犯登録のあるものは警察へ引き渡されます。引き取り手のないものは登録を抹消され、最終的には廃棄される運命。でも簡単な修理でよみがえる自転車もけっこうあるのだそうです。

まだ使える自転車が
意外と多いんです



から販売しており、先日の販売会では即完売に。「長崎は自転車屋さんが少ないことも、放置自転車の一因と考えられます。バンクくらいでつい乗り捨てしてしまうのです。今後は有料で修理サービスや工具の貸し出しもやっていきたいですね。修理仲間を増やし、部品で自転車以外のものを制作するなど自転車修理を楽しみたい、と綿密な計画を立てるRe:ちやいくるの面々です。

無理のないシステムで
社会に貢献できます。
いっしょに活動しましょう!



「自分たちで作る方が、やる気が伝わる」と手作りした回収箱は、上から弁当箱が入れられ、横から回収袋が取り出しやすい、機能性重視の構造。

RFDプロジェクト

ちりも積もればチャリティに 弁当箱回収で被災地支援

「その『何かしたい』という気持ち、1分で実現できます!」のフレーズと、送金先である茨城県や熊本県などの災害被災地名が記された回収箱が、キャンパス内に点在しています。これはRFD(Returning For Donation = 寄付のための返却)プロジェクトの回収

「回収箱は文教と片淵キャンパスに5カ所置いて、21人のメンバーがローテーションで集めています。換金すれば月4,000円ほどにもなります」と代表の坂井真唯さん(環境科学部4年)。佐藤絵美さん(環境科学部3年)は「最初は汚れたまま回収していたのですが、時間がたつと生ゴミの始末が大変なので、今では各自で内側のフィルムを剥がしたものを回収しています。学生だけではなく教職員の皆さんも協力してくれますよ」とも。目下の悩みは1、2年生がいないこと。「試行錯誤の連続ですが、週に1回程度の活動で確実に成果を出せます。気軽に入ってきてほしいですね。」